

2. 活動報告（注1）

番号	6
テーマ	らしさの探求（からだ）
実施回数・期間 （注2）	令和7年4月～令和8年3月 年間通して
対象クラス・ 対象人数	0歳児クラス 1歳児クラス 2歳児クラス 3歳児クラス 4歳児クラス 5歳児クラス
	人 人 人 11人 人 人
活動内容 （注3）	カブトムシの観察から、自分たちとの身体づくりに発展して体に興味を持ち始めた子どもたちに、より体を動かせる道具を提供しからだについて考える活動をした。詳しくは報告書にて。
活動における チェックリスト	グループ単位での活動等により、乳幼児同士の対話、関わりを促した。
	※乳幼児同士の関わりを促すためにどのような工夫をしたか 身体を動かす活動を順番に行う中で、友達の動きを観察し自分の動きに反映させてみたり、思うように動かなくて悔しい友達を助けようとする姿があった。からだを通してからだを動かせることの感謝や、思いやりを子どもたちに反映できるように意識した。
	活動中の乳幼児の言葉、表情、ジェスチャー等の表現に着目し、メモ・写真・映像等で記録した。
	※記録をどのように行ったか 主に写真と文章で行った。
	乳幼児一人ひとりが主体的に活動できるよう配慮した声掛け等を行った。
	※主体的な活動のためにどのような工夫をしたか やってみたい、できるようになりたいという気持ちを引き出せるよう虫を使った導入や、次は外で等興味を引く導入に力を入れ、うまくいかない経験をさせながらも達成感で終われるように意識した。
	記録をもとに、乳幼児の関心や発見、表現を振り返った。
	※振り返りの実施方法 その日に感じたことを伝えあい、クラス会議で子どもの育ちや、改善点など具体的な話をし、報告にまとめた。
	幼稚園等の各施設の教諭同士や保護者等に、探究活動の内容を共有した。
	※教諭や保護者等への共有方法 掲示板に報告書を掲示し周知をした。
次の探究活動の更なる充実に向け、新たな問いや環境の構成を考えた。	
※継続的な実施のための工夫 子どもの育ちを振り返ることにより、次にすべきことが見えてくるが多かった。振り返りを丁寧に行うことで新たな問いや、環境設定につながった。	

（注1）活動報告は、複数の活動内容を実施した場合は、活動ごとに記入してください。

（注2）「実施回数・期間」欄には、今年度に継続的（月を単位とする複数月）に実施した取組の実施状況を記入してください。なお、原則、単発で実施した取組については対象になりません。

（注3）「活動内容」欄には、どのような取組を行ったのかがわかるよう記入してください。また、活動報告書等、取組を行ったことがわかる書類の写しを提出してください。

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

身体について考えよう

【問いを考える】

かぶと虫の手足ってどうして長いのかな。

かぶと虫のように体を動かしてみよう

2. 活動スケジュール

2025年6月～2026年3月

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

保育室内で育てているカブトムシや跳び箱、鉄棒、マットなどを用意する。

【探究活動の内容】

カブトムシのお世話や、観察をする中で、人との体のちがいや、自分の体をに興味を持ち、自分の思ったように身体を動かすということを経験する。

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

ヘラクレスオオカブトを観察していた時に、日本のカブトムシとの違いに興味をもって「大きさが違う」「角が番う」「毛がある」「足が長い」等の気づきがあった。保育士が「どうして足が長いのかな」と聞くと、しばらく考えて「木に登るから」との返答があった。「どうやって登るの?」の問いかけに「こうやって」とジェスチャーで伝えようとした。「登ってみようか」と声をかけると「のぼー」となったので、マットを丸めたものに順番に登った。1巡目は登れた子どもがいなかったが、2巡目、3巡目になると「上をつかんだら登れた」「足を高く上げたら登れた」「走ったら登れた」等考えて登れる子どもが多くなってきた。虫との体のつくりが違うから、同じようには登れないという気づきと登れた満足感で活動を終えた。



5. 振り返り

今回の活動では、虫の体の特徴への興味から始まり、観察・推測・実際の体験へとつながっていった。子どもたちは「足が長い」という外見的特徴から、その理由を自分なりに考え、答えを出すことができた。さらに、実際に登ってみることで、体の使い方を試行錯誤し、挑戦を重ねる中で新しい方法を見つけ出していき姿が見られた。「登れた!」という達成感は、単に体を動かせた喜びだけでなく、「自分の工夫でできた」という自己効力感にもつながっているように思う。遊びや活動の中で自然と「比較する」「理由を考える」「試してみる」という学びのサイクルが生まれることを、今回の活動で実感した。今後も、子どもたちが自分の体の仕組みや動きを知り、思い通りに動かす経験を積める活動を取り入れていきたい。同時に、自分の体だけでなく、友達や生き物の体も大切にできるような活動へと広げ、命や身体への尊重の心を育んでいきたい。

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

らしさの探求ーからだ

【問いを考える】

カブトムシのようになってマットに登ったり実際に木に登って見たらどんな気持ちになったかな。

2. 活動スケジュール

2025年6月～2026年3月
〈 3歳児 11名 〉

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

保育室で育てているカブトムシや跳び箱、鉄棒、マットなどを用意する。

【探究活動の内容】

前回行った「登る」活動ではマットに登ってみたり実際に本物の木に登ってみたりするなか、「ジャンプしたい」という思いが高まり、跳び箱を使ってジャンプ遊びをする。

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

前回のカブトムシの足の形等について考えていく中、マット遊びが始まり、カブトムシになり切ったような様子でマットに登ることを楽しんでいた。子どもたちに「どんな気持ちかな」と尋ねてみると「カブトムシのように飛びたくなかった」と答える姿があったことから跳び箱を使用してジャンプ遊びを始めた。跳び箱を、目の前にすると子どもたちはわくわくした様子。跳び箱を横向きにして自分なりに高い跳び箱に登ってみせると上に立ち、嬉しそうな笑顔を見せた。少し足を曲げながらマットの上に思い切りジャンプをして両足をしっかり着いて着地していた。「手をカブトムシの羽みたいにして飛んでみたよ」と楽しい気持ちを保育者に話す姿もあった。



5. 振り返り

今回の活動では前回のマットに登ってみたり木登りをした活動後に子どもの思いからジャンプ遊びを取り入れていった。ジャンプ遊びでは事前にカブトムシの広がった大きな羽を見ながら「どうしたら飛べるかな」と考え、「手を開いたら飛べるかな」「カブトムシみたいに飛べるわけないよ」と話す姿もあった。様々な想像をしながら飛ぶことへの興味や意欲が高まっていった。また実際に跳び箱に登って自分で飛んでみると、始める前とは、楽しさや嬉しさを感じている様子で「カブトムシになったよ」となり切って楽しむ様子もあった。今後も子どもたちの学びのサイクルを大切にしながら身体について考える機会を増やしていきたい。

1. 活動のテーマ、問いを考える

【テーマ】

らしさの探求ーからだ

【問いを考える】

カブトムシのように気持ち良くジャンプできた経験をきっかけに自分の体について考えてみる

2. 活動スケジュール

2025年6月～2026年3月
 〈 3歳児 11名 〉

3. 環境設定と探究活動の内容

【環境設定】

保育室で育てているカブトムシや跳び箱、鉄棒、マットなどを用意する。

【探究活動の内容】

カブトムシの観察やお世話を通して自分の体に興味を持つ。生きる力とは 力強く鉄棒を握って自分の体を支えてみよう

4. 活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

跳び箱を使ってカブトムシのようにしてジャンプすることの楽しさを味わったことをきっかけに自分の体について考えてみる時間を設ける。子どもたちは保育者に自分の体でどんなことができるか問いかけられると、「声をたくさん出せるよ」「サッカー上手だよ」「手を使ってじゃんけんできるよ」など自分でできた楽しそうなことを答える姿があった。その中からじゃんけんのぐーのようにして握ってみる動作に興味を持つ姿があり、鉄棒をぐーのようにしてぎゅっと持ってぶらさがってみる運動遊びを取り入れていった。子どもたちの姿では棒の部分でぎゅっと握り自分の重さを知ると「重かった」「手がちぎれそうになった」「頑張ってみた」など言って重みを実感する中自分の手を使って鉄棒をぎゅっと握ることで自分の体の重みがわかったことを楽しそうにして何度も「繰り返しぶら下がることを楽しんでいた。



5. 振り返り

今回の活動では、カブトムシの飼育や観察を通して生態に興味を持ち、子どもたちの「なんでだろう」の思いから探究活動が始まった。カブトムシのように長細い足がたくさんあってその足を動かして木を登ったり、大きな羽をひろげて音を立てて豪快に飛ぶこと、強くカッコいい角など子どもたちにとってはカブトムシとの触れ合いを通して普段あまり見ることのできないかけがえのない経験となった。そんななか夏が終わろうとした頃、あんなに強くてカッコよかったカブトムシが弱り果て、元気が無くなってしまふ姿を目の当たりにすると「全然動かない」「どうしたんだろう」「ゼリー食べさせてくれない」などの感情が生まれ、保育者と一緒に生と死について考える。カブトムシの一生について実際の幼虫や蛹の写真時の写真を見て思い返しなが「生きるって何」「死ぬってどういうこと」など話し合うことで自分をはじめ、他者の存在のありがたみや大切さに気づいていく姿があった。今回の鉄棒遊びではこれらの経験や話し合いを活かし、「順番を守る」他者への思いやり、鉄棒にぶら下がり自らの重みを知ることで「自分の成長の喜び」などカブトムシの生態を探究していくことで様々な要素を交えて自分や他者の大切さに気づくことができた。